

病虫害発生予報 第2号(5月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2301

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症 褐条病 ばか苗病 いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(紀北地域) ツマグロヨコバイ イネミスズウムシ	並 並 並 並 やや少 やや多 やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 黒点病 灰色かび病 ミカンハダニ ヤノカイガラムシ チャノキアザミウマ	並 並 並 並 並 並 並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 チャノキアザミウマ	やや少 並 並 並
タマネギ	灰色かび病 べと病 軟腐病	並 やや多 並	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	やや多 並
ウリ類	モザイク病 斑点細菌病	並 並	果樹全般	カメムシ類	やや少
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	並 やや少 並			

気象予報

1か月予報(予報期間 4月27日～5月26日 大阪管区气象台)

< 特に注意を要する事項 >

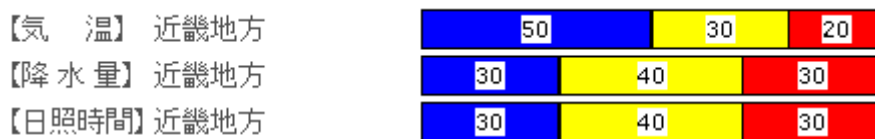
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、低い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率70%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

		月平均気温(平年値) (°C)		月降水量(平年値) (mm)
5月	和歌山	19.3	和歌山	150
	潮岬	19.1	潮岬	249

I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県内全域におけるもみ枯細菌病の本圃での前年の発生面積率は0%（平年4.4%）であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病は場から採種した種子は使用しない。
- ② 種子は塩水選を行い、銅含有剤等で消毒する。その後の浸種は停滞水で行い、2日間は水を交換しない。
- ③ 浸種から育苗中の温度管理に注意し、30℃を超えないようにする。

2. 褐条病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 近年は少発生に推移している。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① もみ枯細菌病による苗腐敗症の項参照

3. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県内全域におけるばか苗病の本圃での前年の発生面積率は0%（平年3.5%）であった。
- ② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 種子消毒を行う。

4. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 種子消毒を徹底する（自家採種では塩水選もあわせて実施する）。
- ② 田植え時に育苗箱処理剤を施用する。

5. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 ヒメトビウンカやや少・縞葉枯病（紀北地域）やや多

(2) 予報の根拠

- ① 4月上旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の川市で3.3頭（平年7.5頭）、和歌山市で1.7頭（平年8.5頭）、かつらぎ町で0.7頭（平年5.5頭）と平年に比べやや少なかった。
- ② 和歌山市3地点およびかつらぎ町1地点におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、いずれも10%以上と前年に引き続き高かった。これらの保毒虫率は、平成3～12年の平均（2.8～3.4%）より高い。
- ③ 平成24年の紀北地域本田におけるイネ縞葉枯病の発生面積は833.8ha（平年値704.2ha）とやや多く、平成23年の発生面積557.3haと比較しても多か

った。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。
- ② 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。
- ③ その他、病害虫防除技術情報第1号参照のこと。

6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生時期 遅 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 4月上旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の川市で3.5頭(平成24頭)、和歌山市で2.3頭(平成53頭)、かつらぎ町で17頭(平成73頭)であった。
- ② 越冬世代の50%成虫化時期は4月3半旬(平成3月6半旬)と平年に比べて遅かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 前年発生が多かった地域では、田植え時に粒剤を育苗箱施用する。

7. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による4月1～4半旬までの誘殺数は、那智勝浦町1頭(平成1.2頭)と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時に粒剤を育苗箱施用する。
- ② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病(白斑葉枯病)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 4月3半旬現在、紀北地域での発生ほ場率は0%(平成0.3%)であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
- ② 罹病株や収穫後の残さはすみやかに処分する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域での4月3半旬の発生ほ場率は42.9%(平成19.2%)であった。
- ② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くする。
- ② 罹病株はほ場から持ち出して処分する。

3. 軟腐病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀北地域での4月3半旬の発生ほ場率は0%（平年0.0%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 降雨前後を重点に薬剤防除を行う。

<ウリ類>

1. モザイク病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 施設栽培キュウリにおける4月5半旬の発生ほ場率は紀の川市で0%（前年5.9%）、日高郡美浜町で0%（平年0%）であった。
 - ② アブラムシ類の発生は並と予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. 斑点細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 施設栽培キュウリにおける4月5半旬の発生ほ場率は紀の川市で5.6%（前年0.0%）、日高郡美浜町で9.1%（平年4.3%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設内の換気を良くして湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に行う。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 和歌山市のキャベツにおける4月4半旬の発生株率はモモアカアブラムシ17%（平年19%）、ニセダイコンアブラムシ1.0%（平年2.6%）であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）の4月1～4半旬までの飛来数は、28頭（平年43頭）である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 那賀地域のイチゴでは4月5半旬現在、ナミハダニは、発生ほ場率17%（平年22%）、寄生葉率1.0%（平年5.3%）、カンザワハダニは、発生ほ場率33%（平年28%）、寄生葉率1.7%（平年6.7%）と平年に比べやや少なかった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① スイカでは、早くから寄生するほ場外縁部の株において、早期発見に努め、初期防除を行う。
 - ② 同一系統の薬剤を連用しない。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 那賀地域のイチゴでは4月5半旬現在、発生ほ場率17%(平成28%)、寄生密度は1花あたり0頭(平成0.2頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生密度の低い時期から薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 春葉初発日 5月4～5半旬(平成並)
春葉発病量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場(無防除)における春葉の越冬病斑量(発病葉率)は10.3%(平成19.9%)と平成より少なかったが、夏秋梢に越冬病斑がみられた。

② 紀中地域におけるカンキツの発芽期は、「興津早生」(ウンシュウミカン)で4月1日(平成4月8日)、「清見」で4月5日(平成4月8日)であった。

③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 葉害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。

② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

2. そうか病

(1) 予報内容 発生時期 平成並
発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北(海南市下津)、紀中、紀南(田辺市以北)における前年8月の果実の発病園率は6%(平成3%)であった。

② 紀中地域における「興津早生」(ウンシュウミカン)の発芽期は4月1日(平成4月8日)であった。

③ 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発芽直後の防除が高い効果を示すので、常発園や前年多発園では早急に散布する。

② 一般園では満開期に黒点病、灰色かび病を防除する際、そうか病にも適用のある薬剤を用いる。

③ 園内の通風採光をよくし、枝が徒長しない肥培管理に努める。

3. 黒点病

(1) 予報内容 発生量(初期感染) 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹上及び園内外に放置された枯枝を処分する。

② 早生温州、極早生温州、ネーブル等の品種は、花卉離脱直後からの初期感染に注意が必要である。

4. 灰色かび病(開花期)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 連年発生が多い園では、開花期～落弁期の天候に留意し、満開期に防除を行う。

5. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における4月中旬の発生は認められず、マシン油乳剤を散布している慣行防除園においても発生は認められなかった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 冬期から春期にかけてマシン油乳剤を散布していない園では、夏用マシン油乳剤200倍の散布を行う。ただし、開花期に近いと実害は少ないが奇形花を発生させることがあるので注意する。

6. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第1世代1令幼虫初発日

5月3半旬（やや早）

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における越冬完了歩合、寄生量は平年並であった。

② 前年10月の紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における発生果率は0.1%（平年0.4%）、発生園率は3%（平年7%）と平年より少なかった。

③ 第1世代1令幼虫初発日は、予察式*により5月12日と予測された（予測の平年値17.9日、予察ほ場における実際の初発日の平年は、16.9日）。ただし、 $X = 3$ 、4月の最高気温^{*1}（11℃超の各日の気温） $- 11℃$ の積算、 Y は5月1日を起点とした日数であり、 $Y = 12.0$ 日（予測式 Y の平年^{*2}は17.9日、予察ほ場の樹上における実際の初発日の平年は16.9日）であった。

※予察式 $Y = 57.03 - 0.109X$

※1：予測式に使用した最高気温は、3月1日～4月21日まで本年の実測値を用い、4月22日～30日は平年値を代用した。

※2：予測式および樹上における初発日の平年は平成15年から平成24年までの値を使用した。

7. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 黄色粘着トラップでの越冬成虫の誘殺頭数は、果樹試験場内の県予察ほ場（無防除）及び日高郡由良町で平年並であった。発生時期は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イヌマキやサンゴジュなど防風樹近くでの発生が多い。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年10月の巡回調査では、「富有」の発病葉率は27.4%（平年35.9%）

と平年よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。
- ② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。
- ③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布することが大切である。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報根拠

- ① 前年10月の巡回調査では、「富有」における円星落葉病の発病葉率は、8.8%（平年3.6%）、角斑落葉病の発病葉率は17.9%（平年22.7%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 円星落葉病の子のう胞子飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、マンゼブ、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 黄色粘着トラップでの誘殺数は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 落弁期を中心に防除する。
- ② マキヤサンゴジュなど防風樹の近くで発生が多い。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の巡回調査における4月中旬の春型越冬病斑の発生園率は20%（平年4%）、発病枝率は0.3%（平年0.06%）と平年に比べやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 春型越冬病斑は、春葉への伝染源となるので、出来る限り剪除する。
- ② 果実発病は、5月以降、特に降雨により多くなるので、降雨前の予防散布を徹底する。降雨後の薬剤散布は、出来る限り早めに行う。
- ③ マイコシールド連用は、葉先に黄化を生じることがあるので注意する。詳細は、技術情報第2号参照のこと。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報根拠

- ① 紀北地域の巡回調査における4月中旬の、ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は30%（平年23%）、寄生枝率は、1.2%（平年1.9%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、第1世代のふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生ピーク時期の少し前に薬剤散布を実施する。
- ② 近年のふ化幼虫発生ピーク時期は、ウメシロカイガラムシが5月1半旬、クワシロカイガラムシが5月中旬であり、春先の気温で発生ピーク時期は

やや変動する。

- ③ 休眠期のマシン油乳剤による防除は兩種に対して有効である。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での本年の越冬量は、0.04頭（平年値0.23頭（極端に越冬量が多かった年を除く））と、平年に比べやや少なかった。
- ② 県南部での越冬成虫の捕獲地点数、捕獲頭数は平年に比べ少なかった（本年2か所、2頭、極端に越冬量が多かった平成8年を除く過去20か年の平均4.1か所、7.4頭）。
- ③ スギ・ヒノキの球果は前年に比べ多いと予想されるので、夏以降の果樹園への飛来は少ないと考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメの被害には品種間差が大きく、小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。カンキツでは蕾、花を加害するので、被害状況を観察して防除する。
- ③ カメムシ類の最新の発生状況は、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内の農作物病虫害防除所コーナー果樹カメムシ情報を参照する。
- ④ 農薬については最新の登録情報（農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム：<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>）を参照し、適正に使用する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2301)までお願いします。